

二〇二二年アートグループ活動報告

今年度のアートグループは、スタッフの交代やブログによる活動の紹介など運営に新しい要素が加わり、全体的に見て変化の年を迎えた。

アートグループはファシリテーターの筆者が講師の椋田三佳さんと中心となって運営しているが、長年グループやワークショップの開催日に準備を手伝っていただいた常井千恵子さん（ルーム相談員）が三月末に退職され、スタッフが手薄になってしまった。しかし、年度途中から補助として本学修士生の波田あやさんが来られ、グループに参加していただくことになった上、大学院生も一名グループに参加するようになったので、スタッフの受け皿に厚みが増してグループの運営がしやすくなった。

ブログについては、毎回のグループの内容を守秘義務に配慮した形で筆者がまとめ、感想を加えて読みやすいものにしたのをKIH Sの石谷さんがWebに挙げてくださった。何か新しいことを知りたいと思ったときはインターネットでチェックするというのが当たり前の行動になりつつある現在、アートグループの活動を広報し、何をしているのかを知る手が

かりを提示するのは大事なことだと思われる。実際にブログを見て問い合わせの電話をしてくる人がいたり、グループに毎回参加できないメンバーが休んだ回にどんなことをしたのか知る手立てになっていたりと反響があるので、今後も続けていきたいと思う。

アートグループでは毎回課題を変えて制作に取り組んでいるが、今期は新しい試みとしてキャンバスに絵を描いたり造形を施したりするという課題（図1）、カリグラフィ（図2）、「渦巻き」課題（図3）、デコパッチという塗料を使ったデコパージュ制作、勾玉制作（図4）などを行った。カリグラフィは、専用のマーカーなどを使って手本を見ながらローマ字を書いていた。普段のアートグループでは字をメインで書いたりデザインしたりすることが少ないので珍しい課題と言える。また手本に倣うというスタイルも珍しく、課題を自由に解釈して制作することの多い普段の活動とは違った試みだった。筆者の感想としては、姿勢を正し緊張感を保って書写をするという点と、カラーマーカーでアレンジし絵柄を加えていくときに美的な楽しみを味わえる点がこの課題のよさだと感じた。

勾玉づくりもさほど自由度の高くない課題ではあったが、彫刻・彫塑的な課題は少ないので面白い体験だった。制作キットを使い、まず乳白色の柔らかい石をサンドペーパーで丁寧に削って形をつくり、表面の肌理を整えた。石のつるつるとした質感

と削られた石の粉のさらふわとした質感が心地よく、触感に訴える作業になった。必ずしも典型的な勾玉の形にしなくてもよいので、オリジナルな形に仕上げた人もいた。マーカーで簡単に着色でき、石の特性で透明感のある色になるので、神秘的な印象を与える感じがした。あらかじめ紐を通す穴が開いているので首飾りのようにすることができると。自分の手の中で形を得た勾玉を身につけると力を感じられるのではないか？そのような気にさせられる課題だった。

広報活動や毎年ワークショップを開いてきた実績の影響もあって、見学者が増え、メンバーも増えた一年でもあった。スタッフも増えたので、ほぼ満席の状態で行う回数もあり、ごく少人数での活動のときと比較して少しにぎやかになった印象である。しかし、このグループではコミュニケーションを恣意的に促すことはせず、あくまでも共に集ってアートを制作する時間に心身を動かし集中し感情を働かせることを通して、自分に必要なものを持つてかえっていただくというスタンスは変わらない。その結果、緩やかなつながりを感じたりコミュニケーションを楽しんだりしたらよいと筆者は考えており、観察し感想を聞く限り、参加者にはそういう体験が多少なりとも得られていると思う。

(内藤 あかね)



図 1



図 2



図 4

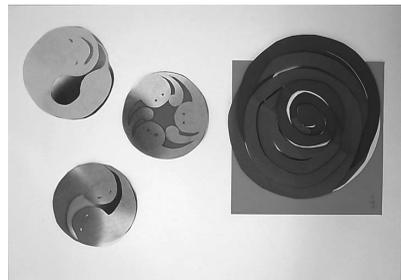


図 3